

加曽利貝塚 B 地点の位置と 1922 年の測量について — 付 測量と調査に関する誤った記述について —

菅谷 通保（千葉市埋蔵文化財調査センター）

1 本稿の目的

1924（大正 13）年 3 月 24 日～4 月 4 日、東京帝国大学名誉教授小金井良精と、人類学教室の松村瞭を中心とし、人類学教室専科生とその卒業生をまじえ、石器時代人骨の発見・採集を目的に行われた加曽利貝塚の調査（以後「1924 年調査」とする）は、「加曽利 B 式」・「加曽利 E 式」設定の契機となった発掘として日本の考古学史上に名高く、現在特別史跡となった加曽利貝塚の評価の柱の一つと言えよう。

2017 年に刊行した『史跡 加曽利貝塚 総括報告書』（千葉市教育委員会 以下「総括報告書」と記載する）において、筆者は 1924 年調査での「B 地点」を、大山史前学研究所の報告（1937= 以下「史前研報告」とする）に池上啓介が「大正 13 年 3 月、小金井良精博士一行の帝大人類学教室の発掘点に近接する」と記述した「BI 点」付近で、いわゆる南貝塚の南端に近い辺りに比定した。1924 年調査に関する小金井良精の野帳と日記を紹介した西田泰民（2014）も BI 点近傍とする見解である。

一方で（八幡 1924）の「大山公爵の試掘地に接し」との記述に基づき、史前研報告「B11 点」に比定する青沼道文（2000）・堀越正行（2017）の見解もある。「大山公爵の試掘地」が大山柏の 1922（大正 11）年 8 月 30 日調査「B11 点」を示すのであれば、1924 年調査当事者の一人である八幡と、「B11 点」調査当事者の大山の指導のもと記述されたと推測できる池上と、いずれかが間違っているとしなければならないが、はたしてどうであろうか。

（堀越 2017）の言及にある通り、史前研報告掲載の大給尹作成挿図二枚（加曽利貝塚一覽図＝本稿第 4 図）・（発掘地點附近要図＝本稿第 5 図）は、縮尺もそれぞれの右下に示してあるスケール通りとは考えられず、貝層堤の範囲も類似しつつ一致しないなど、特に第 5 図に示された各点を現在の地形上に比定するのは困難である。第 4 図・第 5 図が貝層堤を互いに向き合う二つの弧として表現するのに対し、現状は北西・南東の弧状貝層と南西の島状貝層の三つに分かれている。史前研報告の時点で島状貝層はいずれかの弧状貝層と一体で認識されていたと仮定し、総括報告書ではおおよその位置を考えてみた。大山作成の（貝塚附近鳥瞰図＝本稿第 3 図）では、北貝塚と接続する西側貝層堤の先端が東に向かって強く屈曲し、一方東側貝層堤は緩やかな弧を描いて南に延びる。この傾向は第 4 図・第 5 図でも同じであることから、島状の南西貝層は北西貝層と一体で史前研報告にあらわれていると判断し、BI 点と B 地点を南西貝層の東端付近と想定した（註 1）。また史前研報告 fig.32 掲載の CI 点純貝層出土とされた赤色塗彩土器の同一個体と思われるものが、南貝塚貝層断面観覧施設建設に伴う 2 次調査Ⅲトレンチ再調査で出土している。「CI 点は BO 点の北方的 40 米のところにして現在畑地に接する部分」「BO 点と同じ小丘上にありてこの丘の最高部に相当する」との記述から、2 次調査Ⅲトレンチ 2 区の 28 グリッド付近が最も疑わしい場所と考えた。以上から敷衍して第 5 図 BO・B11・CW・CI の各調査点は、現在南貝塚貝層断面観察施設を設けている付近に存在する可能性が高いと考えている。

総括報告書刊行により、従来語られてきた加曽利貝塚の内容に不明確な部分が多いと明らかにできた。

特別史跡指定に前後して千葉市では実態解明のため計画的かつ限定的な調査を実施してゆくこととし、2017 年秋より発掘を開始した。その第一期として 2019 年まで実施した 14 次調査については報告書刊行に向け現在整理作業を行っているが、村田六郎太（1999）の検討で予想された以上に 2 次調査トレンチの位置がずれていることも明らかになり、従来の調査成果を正しく評価するためのさらなる調査の必要性も明確になった。調査地点の確定が必要なのは戦後の調査に限らない。戦前行われた調査、中でも 1924 年の調査区と、史前研報告に示された大山史前学研究所と早稲田第一高等学院史学部の調査地点は、いずれ確定を期さねばならない課題である。本稿第一の目的は、先述の通り解釈の分かれる 1924 年調査 B 地点の想定範囲を絞り込むことにあり、小金井野帳を紹介した（西田 2014）と、『小金井良精日記』（2015a・b・2016= 以下「日記」と記載する）の内容の精読をもって開始したものである。

特に日記から 1924 年調査を計画する過程での大山柏と小金井・松村との濃密というべき関係を認識し、大山が 1922 年に作成した測量図と史前研報告掲載の図とは別物であることに気づき、南北二つの貝塚の複合としての加曽利貝塚の認識が生じた過程も見直すべきと考えるに至った。これを説明するのが第二の目的である。

さらに補足的な事項であるが、総括報告書作成の過程で、「加曽利 B 式」が関東地方縄文時代後期中葉の土器型式として認識される根拠となった 1924 年調査 B 地点貝層出土土器の可能性のある資料の存在に気づいた。現状ではあくまで状況証拠からの推測に過ぎないが、1924 年調査区の確認と再調査によって確定も期待できると考えている。あわせて説明したい。

なお人類学教室による 1922 年・1924 年と大山個人及び大山史前学研究所に関連する史前研報告記載の調査の位置はアルファベット大文字で示されているが、混乱を生じやすく思う。本稿では人類学教室によるものを A~E の地点、史前研報告記載のものを例えば BI 点のように点をつけて記載していく。また以下では引用文を含め傍点はすべて筆者によるものである。

2 野帳と日記 予備調査と本調査の経緯

西田泰民（2014）によって 1922 年予備調査の状況を伝える日記内容と、1924 年調査にかかわる小金井の野帳（以下小金井野帳とする）が紹介されたことは、1922 年の大山による加曽利貝塚測量図の性格を考えるうえで極めて重要であった。以下は西田の報告内容とほとんど重複するが、西田報告後に刊行された日記を含めて改めて検討し、予備調査から本調査へと至る流れを確認しておく。

（1）予備調査から本調査への準備

1922 年に、小金井・松村・大山が予備調査として「実測や試掘を行った」ことは、（八幡 1924）に言及がある。1922 年 9 月 5 日の予備調査にいたる経緯は、小金井日記によって次のように追うことができる。

1907（明治 40）年 11 月 10 日、小金井は人類学教室にあった加曽利貝塚出土人骨（註 2）を借用し、年末にかけて頭骨の接合や所見の記述を行ったことが日記にみられる。加曽利貝塚に対する小金井の関心と、自ら発掘によって資料を得ようとするきっかけはこの時点にあったのだろう。

1922（大正 11）年 3 月 16 日に小金井と松村瞭は、大山柏が「独逸東亜学会」（註 3）会員を招いた大山邸での「考古物展覧会」を訪れる（註 4）。小金井日記での大山柏の名の初出である。人類学雑誌での新入会員や例会・評議員会・年会の記載からみて、大山は 1917（大正 6）年の 2 月頃に編集幹事石田収

蔵の紹介によって入会し、1919（大正 8）年 10 月 16 日の年会で 1 名欠員のあった評議員に推された。従って少なくとも 2 年以上前から小金井と大山は面識があっておかしくないが、親しくなったきっかけはこの時であろう。

次に大山の名が現れるのは 5 か月後の 8 月 17 日で、大山と松村が連れ立って小金井の研究室を訪れ長時間にわたる歓談があった。以後の日記に頻繁に両名と加曽利貝塚の名が現れるので、この時加曽利貝塚の発掘が話題となったのではないか。小金井は 9 月 1 日に「小川町にて千葉の地図一枚」を買い求めているが、加曽利調査準備の一環と見るのが妥当であろう。翌 9 月 2 日には大山と松村が研究室を訪れ、大山が 8 月 30 日に加曽利と「貝塚」（註 5）を「探検」（小金井日記と史前研報告記載の日付が一致するから、B11 点の発掘と判断でき、この時荒屋敷貝塚も発掘したかもしれない）し、両方とも人骨発掘に有望という感触を持ったのだろう。まずは従来から関心を持っていた加曽利を調査すると決めて、9 月 5 日に小金井・松村・大山で加曽利貝塚現地を訪れ、地形測量を行うことに話はまとまった。

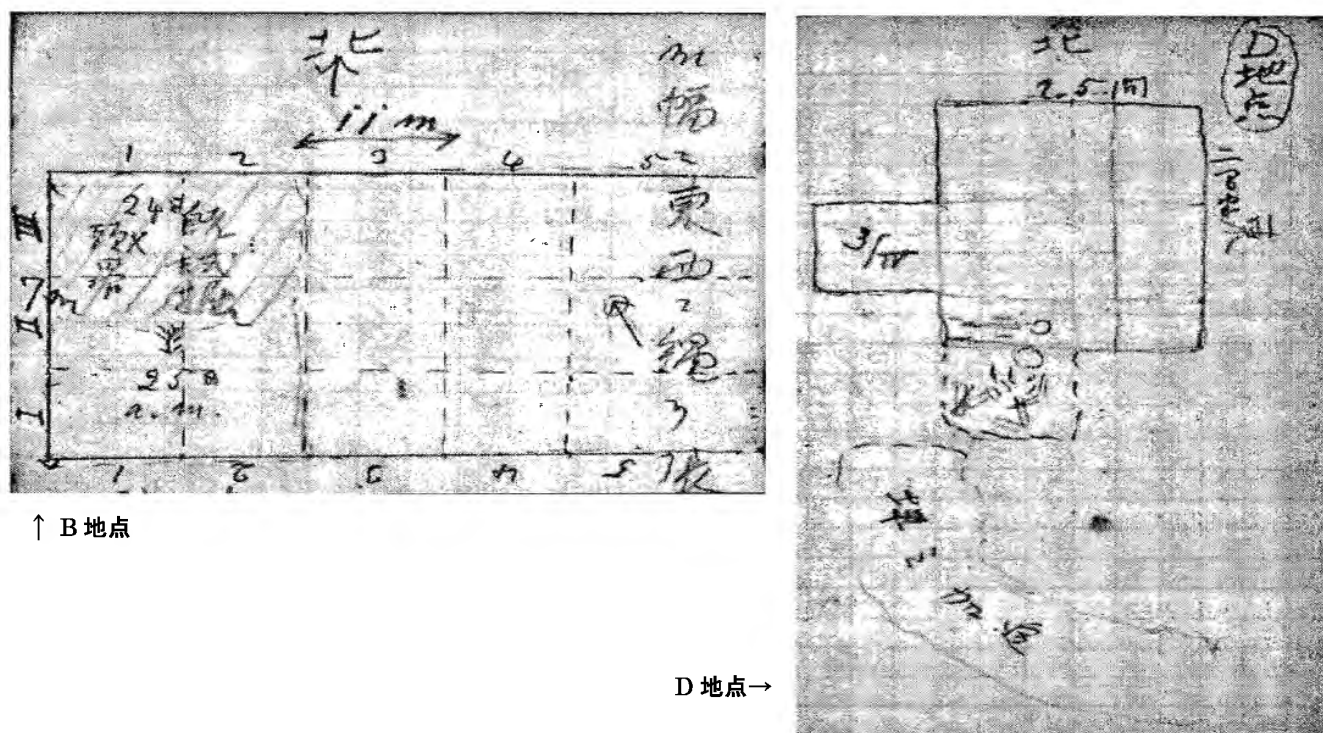
9 月 5 日、小金井・松村と「従者五名」（註 6）を伴った大山は、両国駅朝 8 時の列車で出発し千葉駅から歩いて 11 時に「二軒屋」に着く。「小憩、貝塚を一周し一時戻りて弁当 午後大山氏測量、松村自分は試掘、家主と談合、十月下旬発掘作業を始むることを約す」とある。加曽利貝塚の状態を確認し一周して、一時（いつとき）なのか午後 1 時なのかどちらともとれるが、休憩した場所に戻って昼食を摂ったのち、午後に大山等は測量し小金井・松村は試掘を行った。特に移動した記述もなく「家主」が出てくるので、「二軒屋」＝「家主」＝土地所有者であろう（註 7）。この年の 10 月下旬に本格的発掘に着手することで、地主の了解を得たと理解できる。

9 月 8 日、「午刻松村氏来室大山氏貝塚測量図持ち来る」、松村が大山の測量図を持参したのか、松村とともに大山が測量図を持参したのかいずれにもとれるが、この日大山が 1922 年に作成した加曽利貝塚測量図が小金井のもとにもたらされた。この図は（八幡 1924）に言及があるので、人類学教室か小金井の手元かで保管され、1924 年調査の際に参照された。しかしこの測量図がその後どうなったのか、日記にも記載はなく不明である。史前研報告に大山が「本貝塚大部分の状態に就いて、私は既然大正 11 年頃、測定もしたが」と述べたのはこの図の事で、小金井の加曽利貝塚発掘調査の予備調査の一環であったことが判明する。

その後小金井は、9 月 19 日に人類学教室主任の鳥居龍蔵に計画を説明、鳥居が快諾したので、小金井と人類学教室共同の事業として加曽利貝塚発掘は位置づけられたと考えられるが、9 月 29 日に松村によって伝えられた伊川津貝塚の情報をきっかけに当時内務省囑託の柴田常恵と共に伊川津貝塚・保美貝塚での人骨調査に傾注することとなり、一旦は予定していた 10 月下旬の加曽利貝塚発掘開始を月末に繰下げ、10 月 26 日には大山・松村と相談して渥美半島の発掘継続・加曽利発掘延期を決定、11 月 1 日には予備調査での「家主」で 1924 年調査時に宿舍を提供した海保定吉にその旨を伝達したとある。

翌 1923（大正 12）年 5 月 5 日、小金井は加曽利貝塚を訪れて遺跡の様子を見、上羽貞行と行き会い、海保方で石灰製造のための貝取りの際採集された遺物を見るなどしている。5 月 7 日には人類学教室を訪れて松村に加曽利発掘を 9 月に行うと伝えているので、5 日には海保とこの予定を調整したものであろう。しかし 9 月 1 日に発生した関東大震災のため発掘は再度延期を余儀なくされるのである。

1924（大正 13）年 3 月 16 日、震災後の混乱がまだ続き、松村の博士論文審査に端を発した鳥居龍蔵辞任騒動の余波も落ち着いてはいなかったと思われるこのタイミングで、小金井は「加曽利貝塚発掘打ち



第 1 図 小金井野帳の B 地点・D 地点見取図（西田 2017 より転載）

合わせに出向」する。「千葉より兼坂まで人車（註 8）」とあるので相手は海保定吉であろう。「二十四日（月曜）より着手のこととす」二年越しの計画が実現することになる。

（2）本調査の発掘区と調査所見など

西田（2014）による小金井野帳（以下「野帳」とする）の紹介で、八幡（1924）以外にほとんど情報のなかった 1924 年調査の各発掘区について、比較検討する情報があると判明した。以下には西田紹介の内容を八幡の報告と対照しながら B・D・E 各調査区の情報を探しておく。

B 地点

初日の 3 月 24 日午後に、発掘は B 地点で開始された。八幡が「大山公爵の試掘地に接し、上羽貞幸氏発掘地を含ませて」と記載し、小金井の野帳も「大山氏製図 B 地点、これは同氏及昨年十一月上羽氏試掘の地」としており記述は整合する。野帳 3 月 25 日には B 地点の見取図（第 2 図左）が記され、「試掘地を含みて南北 7m 幅に東西に縄を張り東に進むこととす」の記載がある。図から東西 11m・南北 7m の発掘区を、南北を I～III・東西を 1～5 の 15 区画に設定したと解り、西田指摘の通り八幡の記述とは合わない。図では III 列・5 列が他より幅があるように見えるので 3m 幅、他を 2m 幅と考えれば数字は合う。B 地点調査区の大きさ・形状は野帳に基づき想定すべきだろう。

「既試掘地」で甲野が計測した層序所見があり、尺寸での記載をメートル法に当てはめると、表土約 50 cm・貝層約 90 cm・「黄褐色黒土」約 30 cm で「地盤赤地」に達する。表面から地盤まで約 180 cm である。また上記試掘区より南方（区では II-1・2、I-1・2 に当たると思われる）では貝層約 60 cm・褐色土 60～70 cm、III と II 北半の 1・2 区に対して、南に向かって貝層の厚みが減じていくことが窺える。調査区東端である II-5 区では「この地点より東方貝層薄くなる」というので、貝層堤東端に近いのかもしれない。

E 地点

発掘 5 日目の 3 月 28 日、(註 9) B 地点の北東に新たにトレンチを設定して E 地点とした。B・D 地点で人骨を検出した 31 日に中止されている。八幡の記述では「B 地点の北方二三町水田に臨む台地の端の急傾斜面」、野帳では距離の記述はないが北東とする。調査区の規模は「東西 2m、南北 10m」とあるが、現在 E 地点と想定されている北貝塚東斜面に南北に長い調査区は想定できないので、東西・南北を取り違えているのではないか。八幡は「下の方から上へと掘り進んだ」と記載するが、野帳では逆の記述である。層序に関して野帳に「下方に漸々貝層薄くなる、貝層下暗褐色土、以下漸々赤くなる(地盤)」とあり、また「表黒土五寸位、貝層一尺位、カシヤゴ多し、褐色土一尺にて赤土となる」とも記されている。

D 地点

E 地点開始の 28 日、目的とする人骨にまだ恵まれていない小金井と松村は、更に新たな調査区に着手する必要を感じたようだ。宿舎で家主に相談し、土地所有者の承諾が必要なため翌日家主と松村が交渉に出かけ、4 月 1 日には調査面積を追加するため小金井自身が交渉に出かけている。着手は 3 月 31 日と野帳にある。

調査区は「東西一間半、南北二間」というから 2.7m×3.6m の南北に長い長方形である。D 地点の見取り図(第 2 図右)には、南と西に方形の拡張区が設定された様子がわかり、一間=4 方眼で表していると見られるから、凡そ 1.4m 四方ずつの拡張区であるが、西側の拡張区について野帳に「西方に 2m 幅に進む」との記述がある。元々の発掘区の南側に、追加分三坪が 1/4 に割ったドーナツ状に描かれ、3 方眼分の幅である。

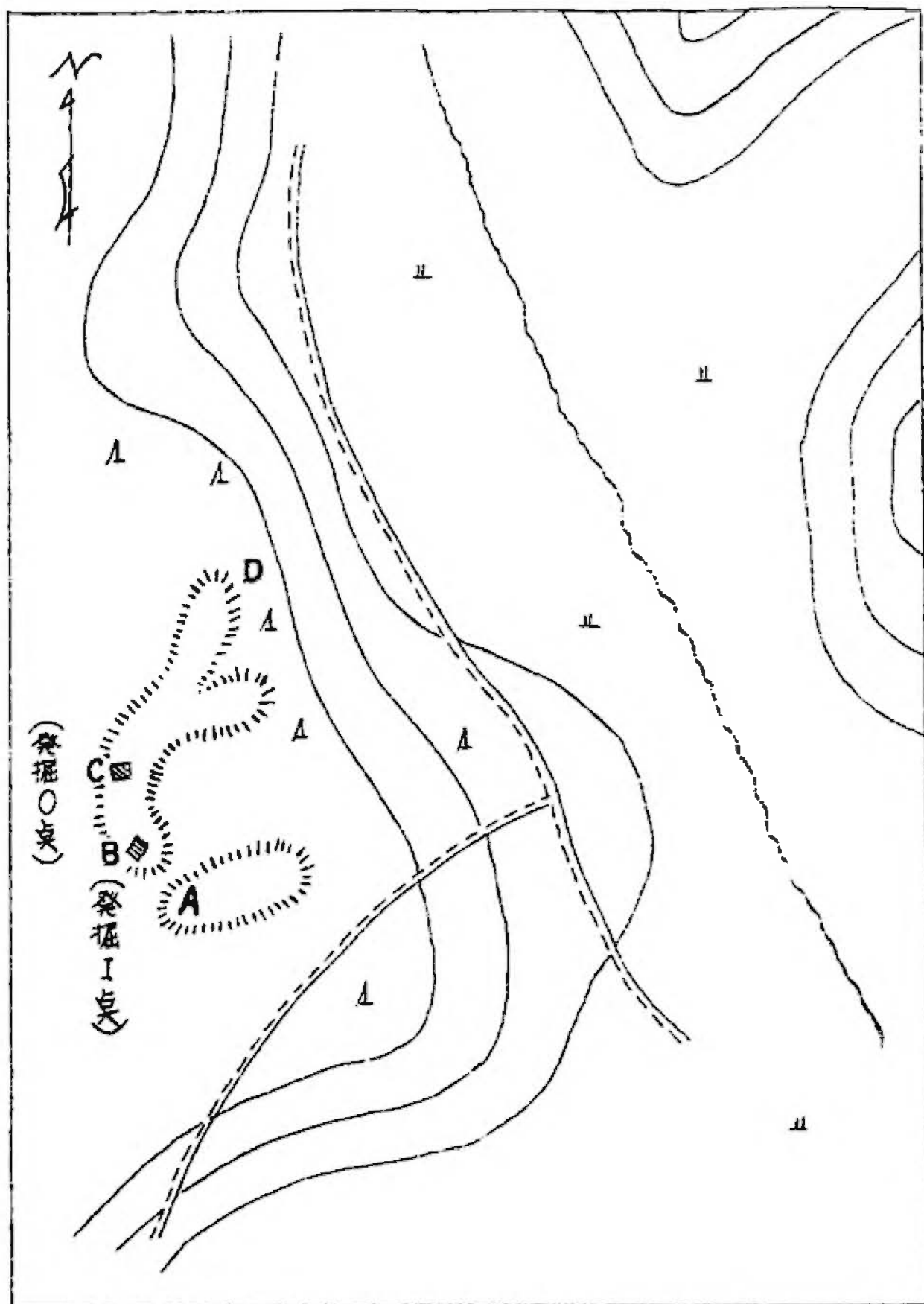
層序について「表面より二尺黒表土一尺、貝層二尺余」とあるが貝層下の層に言及はない。D 地点で検出した人骨はいずれも貝層中であつたといい、終了前日ということからすると、人骨より下の貝層を掘り抜かなかつた可能性が高い。

小金井野帳によって、B・D・E 各調査区の外形と規模が判明することは、加曽利貝塚の今後の調査を通じて 1924 年の各調査地点を確定するうえで、極めて重要な手掛かりとなる。人骨の埋葬状態についても小金井による観察が記録されているので、調査区壁が確認できる状態で遺存していたならおよその位置と頭位方向・葬方までわかるので、加曽利貝塚での墓域を復元するうえでの貴重な資料として生かすことができよう。

B・D・E の調査地点相互の位置関係について、八幡では E 地点を「B 地点の北方二三町」、D 地点を「B 地点の北、E 地点の西に当たる」とする。野帳は E 地点を B 地点の北東とするほか特に記載はないようだ。八幡の記載では 3 地点相互の方向に矛盾が生じるので、B 地点から見た E 地点は野帳に基づき北東方向でよいだろう。ただし残念ながら、今日加曽利貝塚の中で位置を特定する直接的な根拠にはなりえない。

3 史前学会パンフレットと史前研報告

前項(1)に見たように、大山柏は 1922 年 9 月 5 日に加曽利貝塚の地形測量を初めて実施し、完成した図(以後「1922 年測量図」と呼称する)は 1924 年調査に際して役立てられた。1924 年調査ののち、小金井か松村あるいは人類学教室が保管していただろう、公表されることのなかったこの 1922 年測量図



第2図 『加曾利貝塚の概要』掲載測量図（史前学会 1936 より転載）

が加曽利貝塚をどのように表現したものだったのか、その後どうなったのかが気になるところである。

というのも、「大正 11 年の大山柏・大給尹らの地形測量によって、はじめてその全貌がとらえられ、貝層部がメガネ状や 8 字形という特異な形態を呈することが注目された」（後藤和民 1974）に端を発すると思われる、「連接せる二個の環状をなす点は、本貝塚の一大特色である」との大山の史前研報告（1937）の記述を 1922 年まで遡行させる評価が今日主流を占めていて、後述のように二重三重に誤りを含んだ「定説」によって 1924 年調査 B 地点の推定にも影響を及ぼしているからである。ここでは 1922 年測量図と史前研報告の「一覧図」・「発掘地点要図」との関係を検討すると共に「連接せる二個の環状をなす」という認識が何時得られたものかを明らかにしたい。

大山は渡欧のため、1923（大正 12）年 3 月から 1925（大正 14）年 2 月まで国内に居なかった。関東大震災も人類学教室の加曽利貝塚発掘も、目にすることはなかったのである（註 10）。1922 年測量図の本来の目的は、小金井の加曽利貝塚での人骨資料の採集に役立てることにあったが、史前研報告が示したように接続した南北二つの貝塚が表現されていたなら、小金井日記や（八幡 1924）・（宮坂 1925）等この図を実見した人物の加曽利貝塚への言及に、他の貝塚遺跡に見られないこの特徴が一切現れないとは考えにくい。この点を明らかにするのが以下に見る資料である。

（1 『加曽利貝塚の概要』パンフレット

1936（昭和 11）年 10 月 17 日、「第一回史前学会貝塚見学遠足会」として加曽利貝塚の見学会が行われた。この時配布された表紙・裏表紙含めて 6 頁のパンフレットを、総括報告書巻末資料に掲載できたことは、加曽利貝塚をめぐる研究史を整理する上で幸運であった。

パンフレットは 一．貝塚の説明 二．加曽利貝塚の位置 三．付近の地形 四．貝塚の状態 五．出土遺物 六．総括 という構成で、加えて、加曽利貝塚への経路やバス時刻表、そして第 2 図に示した加曽利貝塚と東側を流れる坂月川更に対岸側の台地の一部まで示した測量図が掲載されている。着目すべきはこの第 2 図であるが、本文中の次の記載も重要である。まず確認しておこう。

「本貝塚の大部分は今日森林の中にあり、且つ土中に埋没して居るから、一般的に細部まで明確には、知り得ない。只今までに知り得た所は次の通りである。」として「表面に於ける貝殻散布の景況からすれば、東西に約二百米、南北に約三百米で、関東地方の貝塚としては、最大級に属する」と、稀な大規模な貝塚であることは述べるが二つの環状貝塚としての認識は無い。半年余り後（1937 年 5 月）の史前研報告では「本貝塚の面積は甚だ広い。表面貝殻を見る所の末端を基準として概算すると、南北に約四百米、東西に約二百米に達する（以下略）」と南北方向の規模がおおよそ 100m 拡大し、「今回其測定図を基礎として、大給氏を労して、貝塚一覧図（略）を作成」と述べているのだから、認識の変化はこの半年のうちの何時か、おそらく見学会の後の早い時期に起きたと推定できる。また 1922 年測量図を基に作成したと明言されているので、大山が原図か写しを保管していたか、小金井等から返却されていたかだったと判明する。

第 2 図は、坂月川と周囲の低地を中心に、東西の台地を等高線で示し、実線と破線の組み合わせで示した道路も、ほぼ第 4 図に近い印象であるが、土堤を示す記号で表現した堤状範囲の形状はかなり異なっていて、全体として坂月川の流路に近すぎる印象を受けるし、所謂北貝塚の大半は図に示されていない。A と付された範囲は南貝塚南東貝層であろうが、ほぼ東西に延びており全長もかなり短い。B~D が付き



第 3 図 貝塚附近鳥観図（大山史前学研究所 1937 より転載）

れた範囲は全体としては弧状で、その北側を二股に分かれるように表現している。

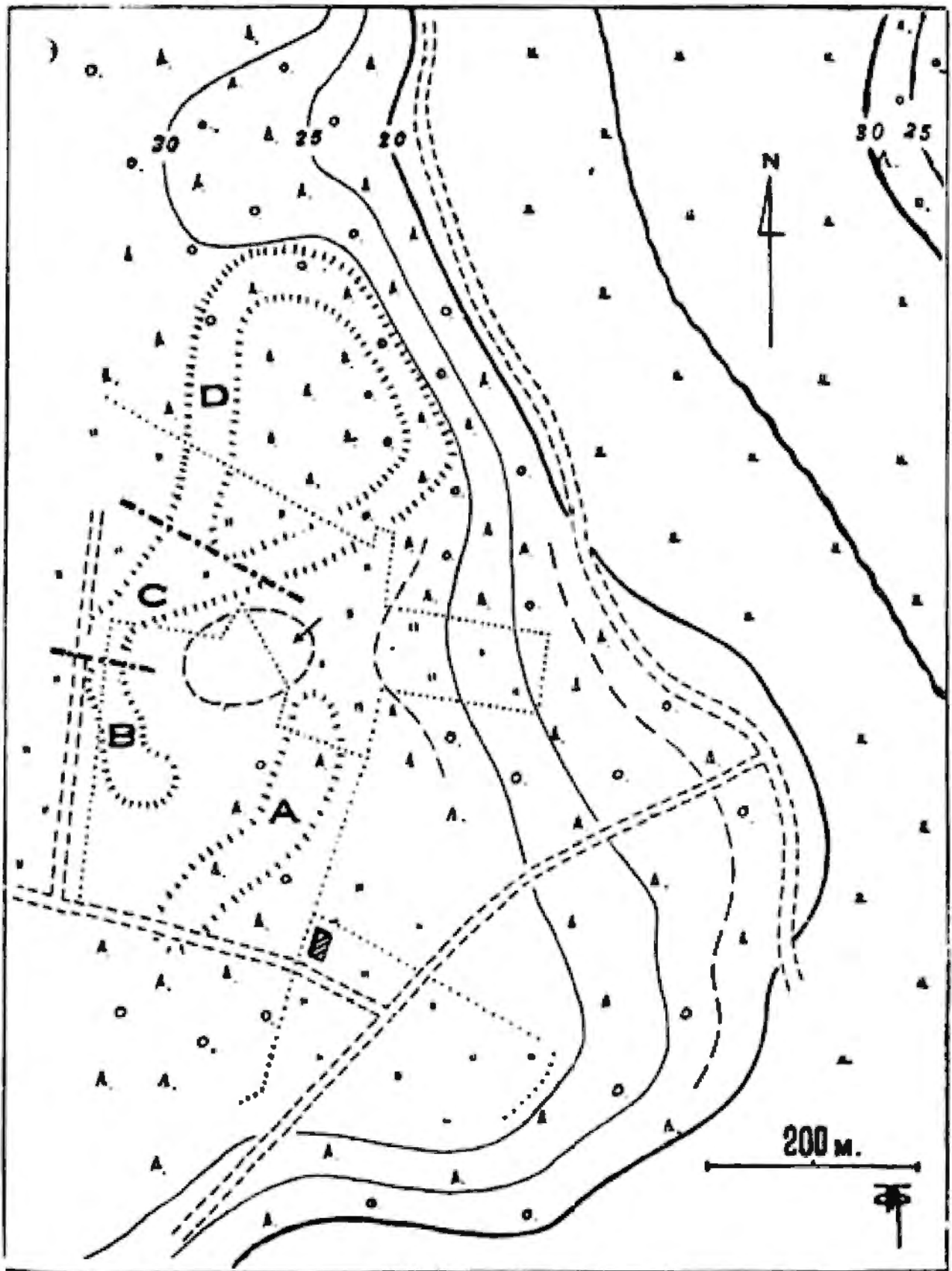
第 2 図が 1922 年測量図そのものとは断言できないが、表現していた内容は汲みとれるだろう。即ち 1922 年測量図を基に 1936 年の調査区 I・O 点（＝史前研報告の BI・BO 点）を書き加えたのが第 2 図と考えられる。そして、上記した貝層規模の記載と第 2 図は、遅くとも BI・BO 両点の調査に着手し CI 点未着手の遠足会用パンフレットの準備段階では、加曽利貝塚が「二個の環状をなす」という認識を大山が持っていなかったことを示す証拠である。

第 2 図は 1936 年の調査地点 BI・BO 両点を（発掘 I 点）・（発掘 O 点）と示し、CI 点は記載がない。見学会当日の様子を記した佐々木邦（1937）は、発掘区が 3 か所で、「早稲田の人達も同じところで掘っていた」とするから、見学会までには CI 点も着手しており、CI・CW の両調査区は同じ場所と誤解するほど近かったのだろう。

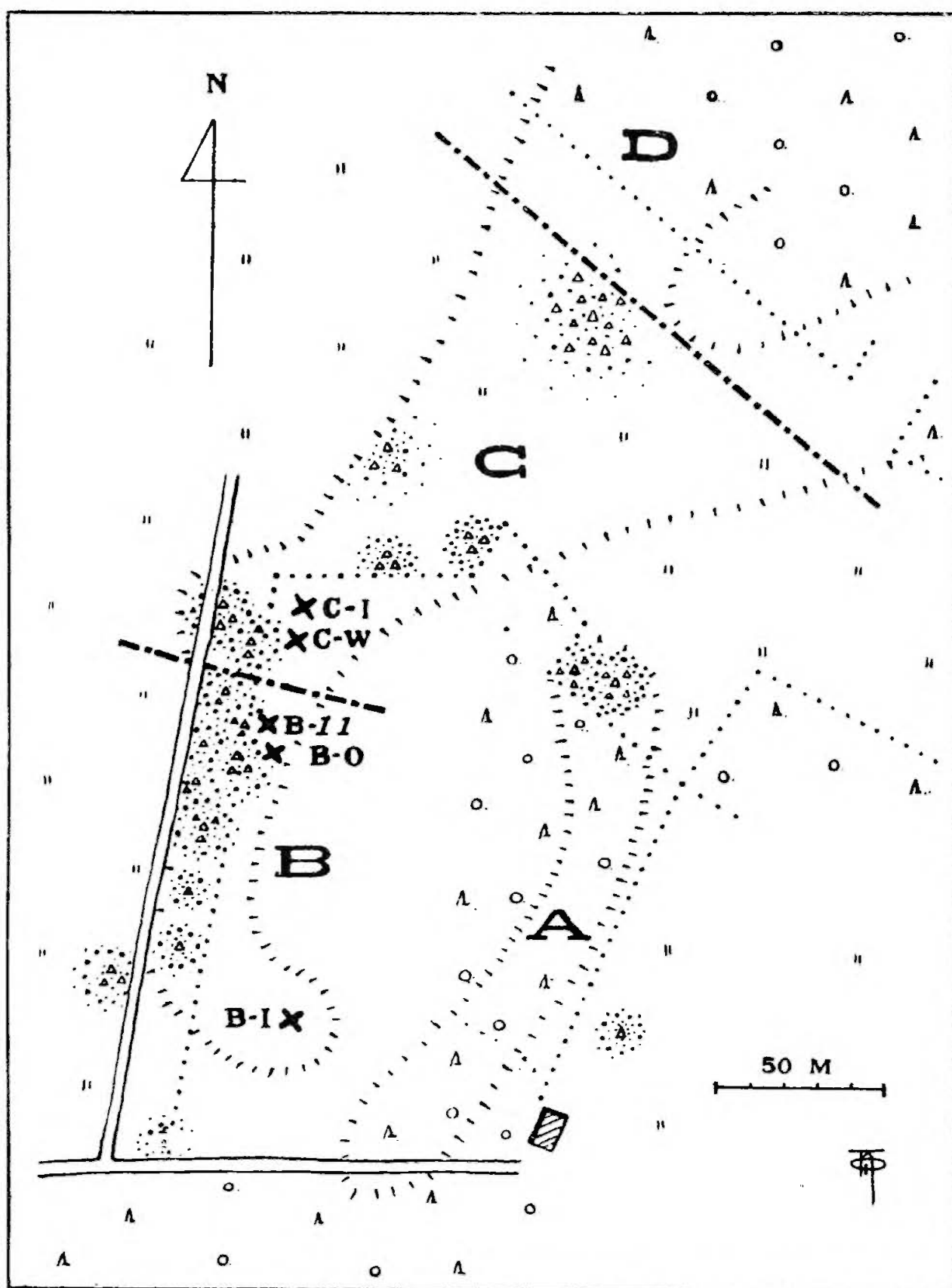
（2 「千葉県千葉郡都村加曽利貝塚調査報告」の挿図の検討

史前研報告に掲載された挿図の中で、第 2 図と比較して興味深いのは、第 3 図と第 4 図である。（阿部 2004）は大山柏が自ら作成した図に自身のイニシャルである O と K を組み合わせたサインを記していたことを紹介しているが第 3 図の左下にそのサインを確認できる。一方第 4 図と第 5 図には右下のスケールの下に O と T・d を組み合わせたと思われる印がある。大給尹のサインであろう。

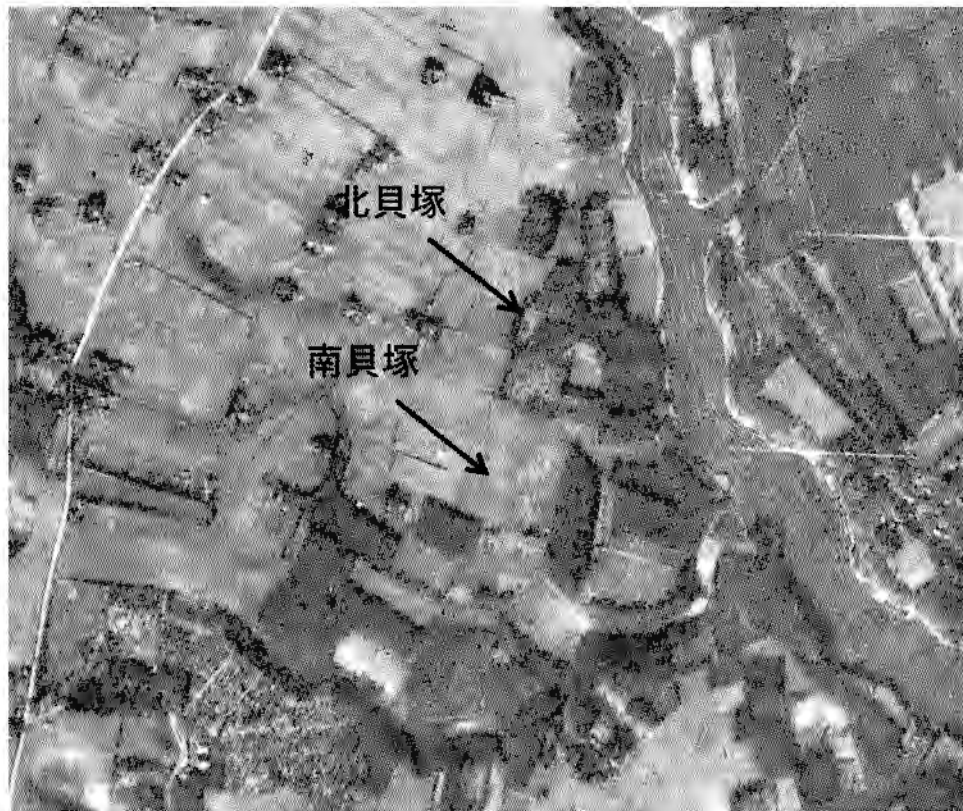
第 3 図と第 4 図では、第 3 図のほうが今日の我々の持つ加曽利貝塚のイメージに近いことに異論はないだろう。測量図でもない第 3 図が現状に近い印象を与える理由は「北貝塚」が環状に表現される点にあり、



第4図 加曾利貝塚一覽圖（大山史前学研究所 1937 より転載）



第5図 発掘地敷附近要図（大山史前学研究所 1937 より転載）



第6図 1948年の加曽利貝塚周辺（千葉市史編纂委員会1993、P192より転載・加筆）

逆に測量図らしき体裁をとっている第4図の違和感は、「北貝塚」の西側が直線的で「南貝塚」の西側との境界が明確でない点にある。第3図では西の外側の線に明らかに曲率の変わる点があり、内側の線はなだらかな環状である。第4図は内側に屈曲点があって外側にはないので逆である。

第2図と第4図は異なる点が多いが、「北貝塚」と「南貝塚」の接合部分の表現はよく似ている。「今回其測定図を基礎として、大給氏を労して」とあるように第2図を下敷きに、主に貝層の範囲と形状を変更したのが第4図で、その際坂月川沿いの等高線に対して貝層全体を西側にずらしたと考えられる。改めて測量（測定）したことを窺わせる記述がないことからすれば、以上の変更は測量によるのではなく、せいぜい現地踏査による図上の改変である可能性が高いと考える。第4図のキャプションが「加曽利貝塚一覧図」で、測量図または測定図とされていないこともこうした事情を物語るように思える。また第5図を第4図と対比すると、一見同じ原図の縮尺を変えて示したようにも見えるが、貝層範囲も貝層の西と南に通っている道も一致する部分がなく、実際には似せて描いた別々の図なのだろう。あくまで発掘地点の相対的な位置の説明を目的に作成された挿図であるから、貝層範囲や道の交差する角度を一致させる必要も感じなかったのかもしれない。大給のサインが入った二つの挿図が、示されたスケールを基準に拡大・縮小しても縮尺が一致しない以上、厳密な測量に基づいたものでないからと考えざるを得ない。そして大給作成の第4図が、大山の「二個の環状をなす」イメージとやや異なるがゆえに、第3図が作成され掲載されたのではないだろうか。

第6図は史前学会の見学会から12年後の加曽利貝塚付近の航空写真で、北貝塚の大半と南貝塚中央部は森林が伐採されずに残っていることがわかる。1936年当時はこの状況に近いがより樹木が広く残っていたとみて間違いあるまい。大給には伐採地の境界線を頼りに古い測量図の補正をおこなうくらいしか術

はなかつただろう。むしろほとんど樹木に覆われていた北貝塚を、現在に近い形で描き出した大山の地形把握能力に、さすが元陸軍将校であると感嘆するばかりである。

(3 試掘地点・区域としての A~D

上記してきた第 2 図～第 5 図の因果関係の想定に基づいて、改めて 1922 年に行われた試掘に立ち返ってみよう。小金井日記によれば、1922 年 9 月 5 日の試掘は小金井と松村が行い、大山は測量にあたった。試掘・測量共に午後から始めてその日の内に終えている。小金井はこの時の試掘区を何か所設けたか記していないが、1924 年の調査経緯を伝える「第三発掘地として松村氏の選定に基づいて、一昨年 D 地点と名づけて試掘を行った所を発掘する事になり」との八幡の記述と、「この堆積堤は低い。(略)これ等の一部は、既然大正十一年測定の際、夫々記載し、且つこれ等の各部分を明にする為、図上に A-D の四点を與て置いてが、それ以外、E 点なる附名に就いては全く私の関知せざる所である」との大山の記述からすれば、試掘区が A~D の 4 ヶ所だったのは確実であろう。第 2 図の A~D は時計回りに配置されており、数カ所の試掘地点に付ける記号としてしごく当然のあり方で、各記号が文字どおり試掘地点を示していると考ええる。

例えば村田六郎太(2013)が「大山は、単に「点」と表現しているが、報告図を見ると貝層に特定のラインで区分けしていることから、現在の区域を意味するものと読みとれる」とするように、史前研報告での第 4 図・第 5 図は貝層範囲の区域分けを行ったと読み取る方が素直な評価であろう。しかし第 2 図が 1922 年測量図に近いものとの考えを前提にすれば、B-C・C-D 間の一点鎖線は昭和 12 年の報告に際して付加されたものであって、当初から存在した線ではない。貝層範囲についての「これらの一部は、既然大正 11 年測定の際、夫々記載し、且つこれ等の各部分を明にする為、図上に A-D の四点を与へて置いた」との大山の文章も、1922 年に既に区域分けが行われていたという印象を読む者に与えてきたが、区画線が無かったとして読み返せば、あくまでも「点」を付したと述べているに過ぎない。

では 1937 年の報告に際してなぜ区域を分ける必要があったのか、それを読み解くカギもまた第 2 図にあると考えている。史前研報告は前年の史前学会の貝塚見学会のために行った発掘を主体としているが、大山個人や研究所の各研究員が過去に行った発掘(B11・AM 両地点がこれにあたる)も併せて報告するものであった。第 2 図での発掘地点の表記は BO 点が「発掘 O 点」・BI 点が「発掘 I 点」であり、そもそもこの時点で区域分けがされていないことが分るが、それぞれ大山地点・池上地点で良かったわけである。しかし見学会当日には O 点の北側に池上主体に新たな発掘地点(CI 点)が設定されており、見学会パンフレットの表記を踏襲すると「発掘 I 点」が二カ所という混乱が生じる。そのためパンフレットでの地点名との整合性を保つために BO・CI の間に区域分けを行い、さらに 1922 年の試掘地点の名称とも関連付けて C-D 間も区画することで、表記の統一性を図ったのだと推測する。小金井日記・小金井野帳と(八幡 1924)でも、地点としての表記はあるが区域あるいはそれに準ずる表現がないことも傍証として、1922 年時点での貝層範囲の区域分けはなかったと判断する。

なお、第 2 図では C に接した位置に「発掘 O 点」があるので、1922 年試掘地 C 地点は第 4 図・第 5 図の B 区域に含まれる可能性があることを指摘しておく。

4 1924 年の加曽利貝塚 B 地点

(1) 史前研報告の 1924 年調査記述の信頼性

1924 年調査の B 地点を B11 点付近とする場合、BI 点が「小金井良精博士一行の帝大人類学教室の発掘地に近接する」との史前研報告の記述を否定する理由をしめさなければならないと考えるが、B11 点説をとる（堀越 2017）はじめこの点への言及は無い。憶測ではあるが、大山が調査を実見していないことから史前研報告での 1924 年調査に関する記述に信頼を置かないとの評価かと思われる。

しかし史前研報告刊行の 1937 年時点で、1924 年調査の参加者 6 名中 5 名は史前学会の会員であり、中でも甲野勇は幹事・小金井良精は 3 名の顧問の内の一人であった。甲野・宮坂 2 名は大山史前学研究所に長く在籍し、宮坂は 1928（昭和 3）年には池上・竹下次作と共に加曽利貝塚を調査し（AM 点）、BI 点での「中期縄紋式土器が貝層下方に発見される」ことについて池上に「人類学教室の発掘区に於ても同様の事実を認められた」と教示したという。1937 年 1 月刊行の史前研報告に、1924 年調査区の記述に誤りがあったなら、5 人ともが異議を示さないとは考え難い。以上から筆者は、史前研報告の 1924 年調査 B 地点に関する記述は十分に信頼に足るものとする。

(2) 1924 年 B 地点に関する記録上の矛盾

既に述べたように、1924 年の加曽利貝塚 B 地点を史前研報告 B11 点とする考えは、「大山公爵の試掘地」が 1922 年 8 月 30 日に試掘した B11 点とみることで成立する。大山の試掘地点を含めて B 地点調査区を設定した点是小金井野帳の記述とも整合するので、大山が試掘を行った地点と上羽貞幸が 1923 年 11 月に人骨を検出した地点が極めて近接していることも確実である。

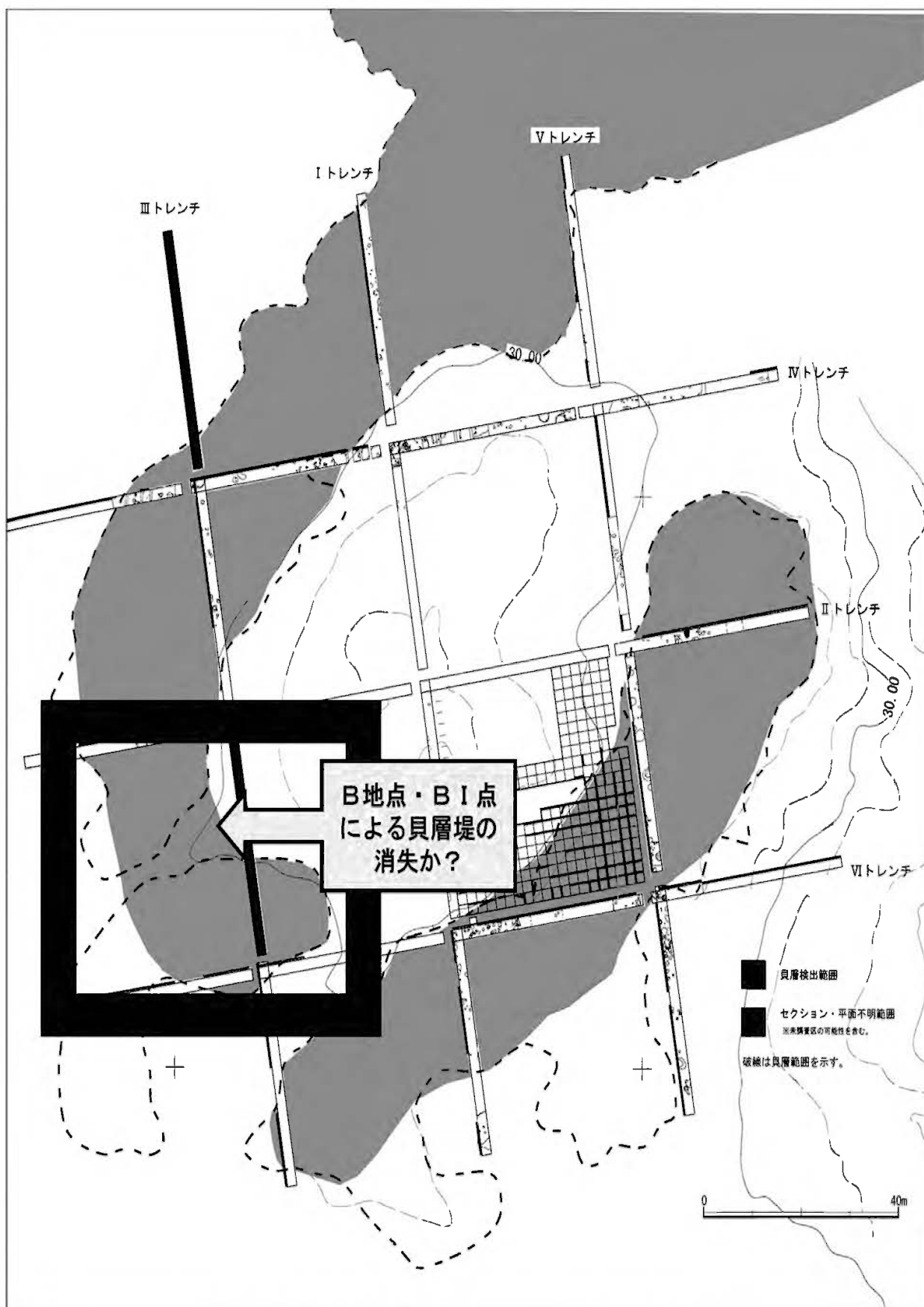
しかし史前研報告で池上が BI 点を「小金井博士の発掘地に接し」と報告し、大山が B11 点・BO 点の報告において一切 1924 年の調査に触れていないことは、大山が池上の記述を肯定しているに他ならない。前項までに見てきたように、大山の B11 点発掘のわずか六日後に作成された 1922 年測量図を踏襲すると考えられる第 2 図に示された試掘地 B 地点は「発掘 I 点」に接していて、試掘地 C 地点の近傍にある「発掘 O 点」の更に北側に位置する B11 点を含めて 1924 年の調査区があったなら、呼称はむしろ「C 地点」を用いてしかるべきである。

以上の大山試掘地をめぐる矛盾の解消策として、1922 年に加曽利貝塚で大山が行った試掘地点が二カ所以上あったかもしれないという可能性を考える。大山は 8 月 30 日の他に、9 月 5 日にも小金井・松村と共に加曽利貝塚を訪れている訳だが、地形測量の合間に一カ所くらいは自ら試掘しなかったであろうかということである。試掘地 B 地点は大山が試掘にあたったと考えることで、「大山公爵の試掘地」の矛盾は解消できる。老齢の小金井と 40 代半ばの松村で、4 カ所の試掘と地主との交渉を半日で終えるのは少々荷が勝ちすぎるのではないだろうか。

(3) 八幡（1924）・小金井野帳と史前研報告の対比による B 地点近接地の妥当性

史前研報告には各発掘地点の面積や検出遺構・人骨を含む出土遺物について当時としては詳細な記録と所見が残されているので、これを小金井野帳の記録と照らし合わせることで、比定地のいずれが 1924 年 B 地点としてより妥当であるかを検討しよう。

さきに 2・（2 項で示した B 地点の情報をまとめると、次のようになる。



第7図 B地点・BI点の想定範囲（総括報告書3-72図に加筆）
 （網掛＝第5図堤範囲のイメージ投影 太枠＝B地点・BI点の想定範囲）

- ・調査区の形状と面積 → 東西 11m×南北 7m の長方形 (77 m²)

※調査区北西隅のⅢ -1・2 区とⅡ -1・2 区北半が上羽と大山により既掘。

- ・地表から地山までの深さと層序

西側 (既試掘 3m×3m) → (表土 50 cm、貝層 90 cm、黄褐色黒土 30 cm)

南側 (Ⅰ -1・2 区辺り) → (貝層 60 cm、褐色土 60 cm 以上)

東側 (Ⅱ -5 区) → (このあたりから東に向かって貝層は薄くなる)

- ・人骨 → Ⅱ -5 区 (調査区東端近く) 貝層下褐色土中検出、伸展葬

※加えて上羽貞幸 1923 年発掘人骨にⅢ -1 区検出の頭骨が接合

- ・各層の出土土器 → 貝層より「加曽利 B 式」・貝層下の土層より「堀之内式」

BI 点は面積「5m 平方」(5×5m=25 m²か?)、表土 (史前研報告では覆土と記載) 35 cm、混土貝層 20 cm、純貝層 30 cm、黒褐色土 60 cm、合計 145 cm でローム層に達する。ローム層の上面は住居址の床面で、発掘区中央で炉址を検出している。住居址の壁は未検出だが、少なくとも黒褐色土の一部は住居址覆土であろう。混土貝層・純貝層からの出土土器として加曽利 B2 式「中妻類型」鉢形土器と粗製土器 2 点 (写真が不鮮明なため確実ではないが加曽利 B2 式かそれ以降と思われる)、更に貝層下褐色土層 (土層説明での黒褐色土と同じか?) からは堀之内 2 式朝顔形深鉢と外面無紋で内面文様をもつ鉢形土器、更に床面に密着して後述の 1 号人骨の膝脇から注口部を欠くのみで完形に近い注口土器の出土が確認できる。完形または器形復元できた個体があと 5 点あるはずだが報告に掲載された土器では確認できない。人骨 2 体を検出し、第 2 号人骨 (片膝を曲げた側臥伸展葬) は黒褐色土中の検出で床面には接していないが、第 1 号人骨 (下肢が交差する仰臥伸展葬) は床面に密着して検出された。

住居址の時期は 1 号人骨との関係でいくつかの可能性はあるが、大まかに 1 号・2 号人骨の埋葬を堀之内 2 式期・貝層の形成は加曽利 B2 式を中心とする前後と考えることができ、B 地点での所見と整合的である。BI 点と B 地点が近い位置関係にあるとすれば、伸展葬の単独埋葬を主体に形成された堀之内式期前後の墓域の上に加曽利 B 式期に貝層を形成した範囲と評価することができる。

一方 B11 点を B 地点とした場合、貝層中から完形の加曽利 B3 式磨消縄紋浅鉢形土器 1 点が出土していることから貝層の時期は矛盾しないが、貝層の厚さと貝層下の層序が不明なため B 地点と整合するかどうかの判断はできない。また「直南」にあるという BO 点がどの程度離れているか記載がないが、第 5 図のスケールでは間隔は 10m ほどに見える。7m より近接していた場合には、さしたる攪乱のない層序が記録されていることから B11 点が B 地点である可能性は完全に否定される。BO 点では、純貝層と混土貝層の境界に二基の炉址が検出され混土貝層上面が住居址床面ではないかと疑われ、竪穴住居が構築された場所という前提で考えれば、堆積状況が B 地点と一致しないことを以て否定する根拠にはならないが、B11 点が B 地点であったなら、小金井等が 1924 年にある程度広い範囲を発掘したことを知っている大山が、敢えてその近傍に調査地点を設定するだろうか。

史前研報告の各点の情報に B 地点特定の根拠は見いだせないものの、BI 点と B11 点・BO 点の比較の上では、BI 点近くがより妥当性が高いと主張する。

(4 B 地点の位置

上記(1~(3)によって、史前研報告に池上が報告した BI 点近傍こそが人類学教室が 1924 年に発掘した B 地点であるとの主張は尽くしたつもりである。それでは正確とはいえない第 5 図上の BI 点は、現状の加曽利貝塚のどの辺りにあたるのであろうか。次に検討して B 地点の位置する範囲を絞り込んでおきたい。

第 7 図は総括報告書 3-72 図を基に作成した。破線で示した貝層範囲中に、第 4 図の堤状範囲のイメージが重なるよう網掛けしている。北西貝層・南西貝層が本来一体のものであり、網掛けが及んでいない貝層範囲は民家の建築造成や石灰製造のための掘削といった人為的な原因で移動してしまった貝殻の散布範囲と解釈しているが、もちろん発掘による可能性もあるだろう。

以上の史前研報告挿図のイメージ投影が概ね妥当とすれば、BI 点の位置は南西貝層の第 2 次調査Ⅲトレンチ 2 区を中心として、太枠で囲った範囲の網掛け部分の何処かであろう。B 地点はこの周辺の堤状貝層の何処かということになるが、北西貝層と南西貝層の間の堤状貝層の途切れた部分・現在園路が通っている付近は有望だろう。(宮坂 1925) では翌年の状況を「広く深く掘り広げた B 地点 D 地点、細く長く掘った E 地点、何れも埋土の上に草生い茂って、其の跡形もない」と記述しておりある程度の埋戻しが行われたはずだが、周囲より高い堤状の地形を 1.5m 程も掘り返し十分な転圧も行わなかったとしたら、埋戻し土の流失があったとしても驚くにはあたらない。もちろん戦後盛んであったという貝取りによって生じた可能性も否定できないのだが、現在最も可能性の高い地点として指摘しておく。

5 B 地点貝層出土土器の行方

1924 年の人類学教室による加曽利貝塚 B 地点の位置について、現状可能な限りの推測を前項に尽くしたつもりである。しかし筆者の推測が的を射ていたとして、今後地中レーダー等の探査をこの付近で実施し、検証発掘を行って首尾よく旧調査区を検出し得たとしても、それだけで B 地点と確定できるわけではない。旧調査区内の埋戻土中に残っているだろう採集もれの土器を回収し、旧調査区壁面の貝層や貝層下土層を新たに調査して得た土器と共に、1924 年調査の出土土器との対比を行い同一個体や接合関係となる資料を見出すことができなければ確実な証明とならない。しかし(八幡 1924)が「遺物の方は人類学教室で私たちが整理を続けている。その結果は他日何等かの形式で発表されると思う」とした調査成果の報告は果たされていない。

1924 年の加曽利貝塚 B 地点貝層出土土器と E 地点貝層出土土器は、それぞれ今日の「加曽利 B 式」・「加曽利 E 式」の名称の礎であり、縄文土器型式の編年研究の実質的な出発点であるという点で、日本考古学史上記念碑的な重要資料なのだが、未公表のままであることに今日まであまり関心が払われて来なかった。この点は 1937 年~1940 年にかけて山内が刊行した『日本先史土器図譜』により不完全な形であるが両型式の細別案が示されて、1924 年資料以外の土器が準拠すべき標識として示されたことにもよるのであろう。しかし、遺跡としての構造の多くが未だ不明な特別史跡加曽利貝塚を、長く後世に伝えつつ学問的・社会的価値をより高めていく必要がある今日、遺跡と遺物とが経てきた経緯を把握する上でも、資料の行方の探求は必須だと考える。

人類学教室に運ばれた 1924 年資料の公表が無かった経緯は不問とせざるを得ないが、加曽利 B 式という名称の基となった B 地点貝層出土土器である可能性を考えているまとまった資料の存在がある。本項において説明する。

(1 1924 年加曽利貝塚調査の出土土器

小金井日記には発掘終了の翌日 = 1924 年 4 月 4 日に「諸氏荷送りす、骨一箱を加えて九箱となる、土器の目方甚重し」とあり、前日の記載には「三骨格を荷造りす石油箱一個に詰める」としている。西田によれば石油箱は一斗缶が 2 本入る木箱とのことであり、現在埋蔵文化財関係で良く用いられている遺物収納用コンテナ (540×340×150 mm) に換算して 1.5~1.6 倍の容量であろう。人骨以外も同じ箱を用いたとすれば、人骨以外の遺物はコンテナ 12~13 箱に相当する量を人類学教室に持ち帰ったのであり、その大部分は土器と考えて良い。B・D・E 各地点の土器の出土量などは小金井日記や野帳、(八幡 1924) の記述から窺い知ることが困難だが、調査区面積や調査深度を考慮すると、B 地点出土土器が点数としては大部分を占めていたと想像できる。

(2 加曽利貝塚に多い「雑な作りの土器」

筆者は史跡加曽利貝塚総括報告書刊行に向けて出土土器を整理する過程で、「雑な作りの土器」・「変則的構成の土器」が他の遺跡と比較して明らかに多いと気づき、特筆すべき加曽利貝塚の特徴であると主張し (菅谷 2017)、また総体として同様の印象を受ける資料のまとまりが別にあることにも気づいていた。

総括報告書のまとめとしては論文的過ぎるという意見があったため、加曽利貝塚にそうした土器が多いことから翻っての遺跡の評価についての筆者の考えは割愛せざるを得なかったのであるが、件の資料に触れる前にここで概略を述べておく。

土器づくりの技術は世代を超えて伝承されていく。それは製作者個人の視点に立てば、全くの素人から始めて、技術習得中の初心者段階 → 平均的な技量に到達した段階 → 熟練の段階という過程を経ていくことである。個々人の向き不向きによって、何時までたっても習熟したと認められない者や、ついに熟練の域に達しない者もいたであろうし、途中で習得すること自体を放棄する者もあったろう。また早くから名人と誉めそやされた者もいただろうが当然稀な存在であったはずである。

個々人の技術習得の過程で製作された土器は、器としての形を成さない物から優品・逸品と認められる物まで様々な品質の物が実際に製作されたと考えられる。初心者の作った器として役に立たない物は焼成されずに原料粘土に戻していたのが実態であったろうから、何か特殊な事情でもない限り、ある品質以下の土器が現在に遺存することは無い。遺跡から出土する例から見て、器形成形の上では、土器の横断面が楕円形や多角形に近い形に歪んでいる物や、底部と口縁が著しく平行でない物、平縁のはずが不規則に波打つ物なども焼成されていた。装飾の上では、文様描線が目論見から逸れてぎごちない物、施文具が何度も器面を離れて方向修正を繰り返す物、施文具の器面への圧力が一定せずに粘土のはみ出し具合を調整できていない物などがある。「雑な作りの土器」と呼んだのはこうしたものであり、器形と文様の組み合わせの上での「変則的構成の土器」と共に土器全体からすれば僅かしか出土しないのが多くの遺跡でのありかたなので、大半がそうした土器である加曽利貝塚の異質さが際立つのである。

さて、「雑な作りの土器」を土器づくり技術のやや劣った作り手の製作物・平均的な作りの土器を平均的な技量の作り手の製作物・優品や逸品を熟練の作り手の製作物とすれば、土器作りの技術を継承している集落で焼成される土器は平均的な作りが最も多く、「雑な作りの土器」がこれに次ぎ、優品や逸品が最も少ないという構成になるのが自然であろう。焼成を許される技量に達した者 (見習職人) も平均的な技量 (職人) となるまでには作り続けて技量を向上させるしか方法はなく、熟練者 (名人) の域に達する者

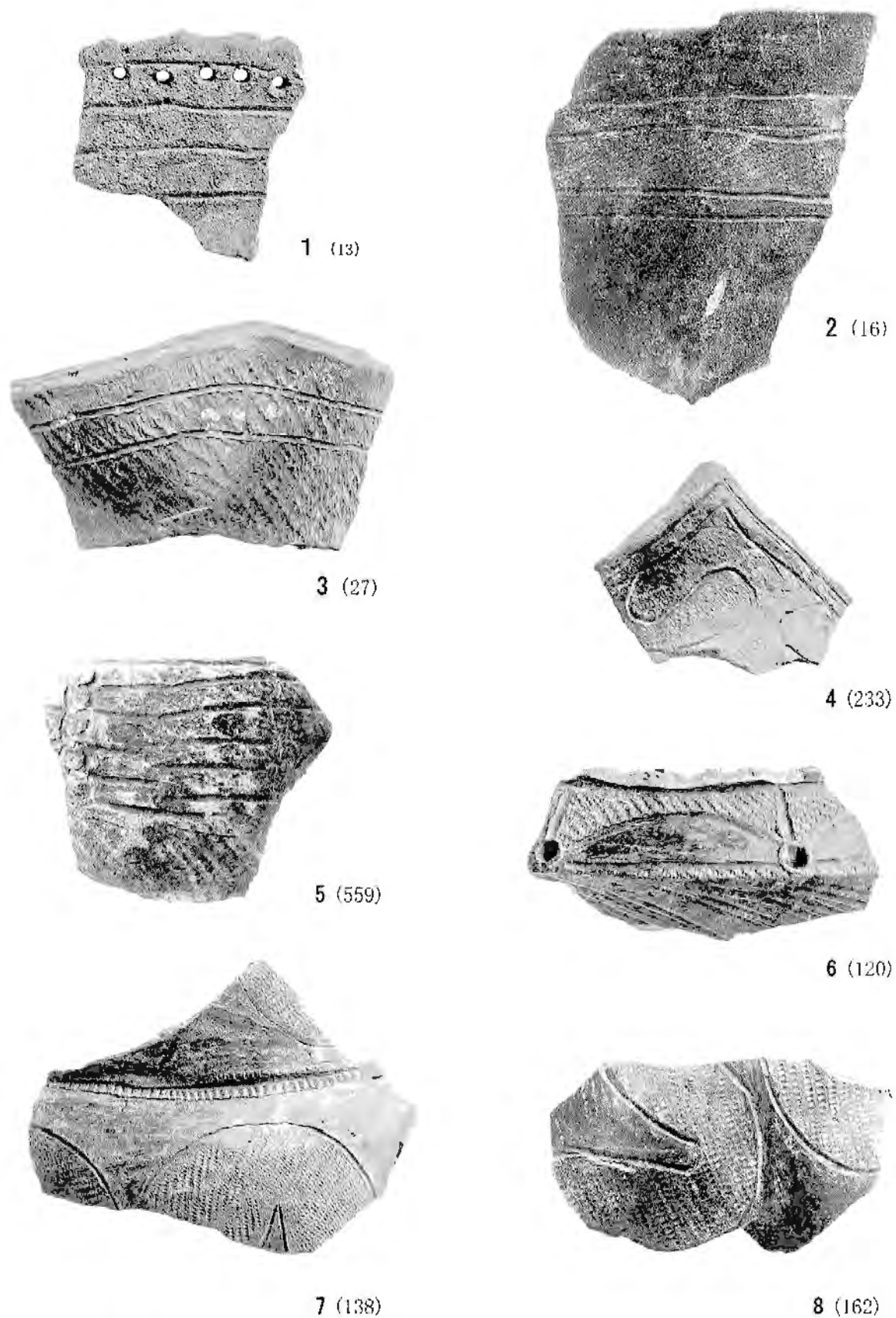
は少ないと考えられるからである。仮にすべての集落で土器作りの技術伝承が行われ製作した土器を消費していたなら、遺跡に残る土器に見られる技量のバランスに顕著な違いは生じないだろう。しかし実際には大抵の遺跡では「雑な作りの土器」が最も少なく、優品が次に少なく、平均的な技量の土器が大半なのである。一方加曽利貝塚や幾つかの遺跡では、優品も平均的な製品も少なく「雑な作りの土器」が大半を占めている。どちらの場合でも土器の劣品・並品・優品のバランスは自家製作・自家消費を前提に考えるなら偏っている。こうした現象の生じる理由として考えられるのが、生産から消費に到る過程にある品質的な選別である。土器生産を行う少数の集落ともつばら土器を消費する多数の集落という関係を考えてとき、消費側は目で見えてわかる出来の良いものを優先的に入手しようとするのが当然の欲求であるから、個々の土器の選択権があれば、優品次いで並品を入手しようとする。わずかに消費側集落にもたらされる劣品は、優品・並品だけでは必要量に満たない場合や「オマケ」なのだろう。「変則的構成の土器」もまた消費側には劣品とみなされ選択対象から外される場合が多かったと思われる。逆に言えば、製作された時点で「変則構成の土器」であっても、消費側がそれを良しとしたなら生産が続き、新たな類型が成立する一因となり、我々はそれを変則とは思わないのである。そして消費側の選択の結果、生産側の遺跡には劣品である「雑な作りの土器」・「変則的構成の土器」が残ることになる。これが加曽利貝塚の土器構成についての筆者の考えである。

以上を踏まえて筆者が注目するのは、山内考古資料 9 として刊行された「加曽利 B 式土器資料」（奈良国立文化財研究所 1998）である。

（3 山内清男考古資料の「加曽利 B 式」

1924 年調査に参加した山内清男は、1946 年東京帝国大学理学部人類学教室非常勤講師、翌年委託講師となり 1962 年 3 月に停年退官後、4 月より成城大学文芸学部教授就任、1970 年の死去までその籍にあった。成城大学の山内研究室には膨大な考古資料と蔵書類が保管されていたが、1975 年に藤本弥城知人方の土蔵に移され、山内清子夫人の希望によって 1984 年奈良国立文化財研究所に移動、現在同研究所が保管している。佐原真（1989）によればこの山内考古資料は「整理用平箱 1052 箱、リンゴ箱 393 箱、ダンボール箱 23 箱」に及ぶ。山内が成城大学に移る際に、山内の元にあった人類学教室資料の一部も運ばれた可能性は否定できないと考える。

この資料の性格について金子裕之は、「山内資料には、人類学教室のプレートを打った資料箱とともに、木製の古い林檎箱に詰めた土器資料がある。箱数にして 150 あまり。内容は実にさまざまで（略）遺跡名が分かる資料だけでなく、遺跡不明品や底部だけを集めたもの、（略）発見地不明の埴輪や陶棺、須恵器、蔵骨器などがある。ここに報告する加曽利 B 式資料は、その一部である。（略）資料は博士が加曽利 B 式の標本としていたもので、林檎箱で 12 箱。外に「加曽利 B 式」とラベルが貼付してあった。発見地は不明である。箱内の資料は大小のグループごとに新聞紙に包んである。その日付はほとんどが 1966（昭和 41）年前後。成城大学に移った後のもので、学生だった戸田哲也氏が、B1 式～B3 式まで含むので勉強するように、と博士に云われ作業したことによる」とし、「一部は精製土器、粗製土器をまとめるなどある種の特性を見せる反面、同一個体が別々の包みや木箱に分かれるなどすべてが統一的に理解できるものではなかった」として安行式資料と似たあり方であるとしている。そして安行式資料には「発見地を記した資料があったが、加曽利 B 資料には皆無である。発見地は不詳であるが、資料の多くは保存状態がよく、



第8図 山内資料「加曾利B式」(奈良国立文化財研究所1998より抜粋 縮尺不同)

※ () 内数字は原本掲載番号

貝塚での採集を示唆する炭酸カルシウムが付着した資料も少なくない。その特徴から常総地域の諸貝塚、遺跡を主とするようである」としている。金子の指摘するように、発見地の記録のある環状体部の注口土器を除き、常総地域の地域的特徴に合致する土器のまとまりと捉えられる。そして本来はこの資料に含まれていなかった可能性の高い件の注口土器を除けば、優品・良品と言える土器は皆無で、良くて並品、大半が「雑な作りの土器」によるまとまりである。

第 8 図は同資料から抽出した、雑な作りであることを比較的説明しやすいものであるが、以下に説明する文様描出上の着目点は同書掲載の土器の大半に当てはまる。1・2 は横帯文を持つ深鉢形土器だが、横走する沈線の描出がぎごちなく平行線とするために細かく向きを修正したり引き直したりしている。3 は粗製土器に用いる固い繊維で撚った原体で施文した縄紋の上から平行線を描く沈線の縁に、粘土のはみだしが顕著に見える。4 は波状口縁で括れを持つ鉢形土器であろう。口縁部に沿った沈線に施文具の裏表を違えている様子や、口頸部の曲線を描く沈線の粘土のはみだしが顕著である。5 は大形の広口壺形土器（遠部第三類）に用いる文様構成だが、碗形もしくは鉢形と見える。水平で平行であるべき口頸部の沈線が思い通りに引けていない。6 はソロバン玉状の体部の土器で、弧状沈線の横の接続を区切る縦位沈線とその下の円形の挟りの部分に、施文ではみ出した粘土を残したままにしている。7 は体部に互連弧充填縄紋を持つ瓢形土器または深鉢形土器。互連弧文の上側弧線の右側、下に向かう部分で粘土のはみだしが顕著である。8 は「つ」の字・「ト」の字文を持つ深鉢形土器の胴部。モチーフを描く沈線に、力加減の調整の不慣れさが表れている。1・2 とおそらく 3 も加曽利 B1 式、4 は加曽利 B2 式前半、5 は同後半、6~8 は加曽利 B3 式である（菅谷 2019 に示した基準による）。

先述したような大半の遺跡での「雑な作りの土器」の希少性に鑑みれば、山内の「加曽利 B 式」資料は、不特定多数の遺跡での採集品をまとめたものとしては不自然なありかたを示していると考えざるを得ないのである。第 8 図では省略したが、同時に報告された粗製土器も含めれば、装飾の特徴から「常総地域」とする金子の見立ては妥当である。金子は「博士が加曽利 B 式の標本としていたもの」とする点について、誰かの証言に基づくものか自らの直接的な知見によるものか明らかにしていないが、実際に山内が標本として用いていたなら、『日本先史土器図譜』で加曽利 B 式の 3 型式細別を示した後にも、敢えて細別型式ごとに分けることをせずに元々のまとまりを維持していたということであり、この資料は元の姿を維持する必要のあるまとまり = 土器研究の過程でのある認識の成立に関わる特定の発掘資料であったと推測してよいのではないか。

以上を踏まえると、「雑な作りの土器」が大半を占めること・「炭酸カルシウムが付着した資料」が少なくないこと・「常総」の地域的特徴を示していることは、現状で想定し得る加曽利貝塚 B 地点貝層出土土器のありかたに合致するものであり、山内が加曽利 B 式の標本としていたとされる資料は 1924 年人類学教室調査 B 地点の貝層出土土器である可能性が高いと考えている。

6 まとめ

小金井野帳と小金井日記に基づき 1922 年予備調査から 1924 年本調査に到る経緯を確認した。史前学会のパンフレットと史前研報告の記載と図の対比に基づき、第 3 図～第 5 図が示す、環状と馬蹄形の二つの貝塚が接続するという加曽利貝塚の特徴が認識され、A・B・C・D の区域を設定したのは、1936 年後半から 1937 年初めのあいだであると推定できた。

B 地点比定地が混乱する原因である B11 点と「大山公爵の試掘地」の異同について、決定的な根拠は見いだせなかったものの、B 地点は池上啓介が担当した BI 点近傍である蓋然性が高いことについて、状況証拠を示してきたつもりである。

総括報告書作成の過程で認識できた「雑な作りの土器」が極めて多いという加曽利貝塚の特徴から、奈良国立文化財研究所が保管する山内資料中「加曽利 B 式資料」として公表された土器のまともりは、1924 年調査 E 地点貝層出土土器と共に、「加曽利 E 式」・「加曽利 B 式」の名称の基となった B 地点貝層出土土器である可能性が高いことも述べてきた。

上記のうち下二つの主張について、筆者は自信を持っているが、決定的な証拠に恵まれず希望的推論の域を出ないことは認めざるを得ない。とは言え特別史跡加曽利貝塚の整備や実態解明のために、更には歴史的・社会的な資産としての価値をより高めていくために、発掘調査が継続されよう今日において、積極的に確認を期さねばならない重要な課題の一つであると明記する。小金井野帳の記載に合致する 1924 年 B 地点発掘区を検出し、そこから山内「加曽利 B 式」資料と接合あるいは明らかに同一個体と認められる土器を検出したなら筆者の推論は証明される。今後の調査に期待したい。

研究の現状と今後の進展によって、踏まえるべき課題は数多存在し増加していくのは必然である。特別史跡に手を付ける者は、それら課題に対して真摯に対峙してゆくことはもちろん、自ら課題を見出すべく研究を進める気概を持ち続けなければならないだろう。

本稿をまとめるにあたり、小金井日記に関して西田泰民氏に御教授をいただいた。西田氏の報告された小金井良精の野帳と、西田氏も尽力された小金井良精日記の刊行がなければ本稿をまとめるきっかけもつかめず、公表にまで至らなかったかもしれない。ここに心よりお礼申し上げる次第です。

付 測量と調査に関する誤った記述について

本文で繰り返し述べてきたように、大山柏による加曽利貝塚の最初の測量は 1922（大正 11）年 9 月 5 日に行われた。小金井日記の記述・（八幡 1924）・（大山史前学研究所 1937）の記述も一致し、実施が 1922 年である点に疑いの余地はない。しかし本稿の調べを進めるうちに、1923（大正 12）年とする誤りが、少なからぬ文献中に見いだされた。関連して 1922 年測量の実施者として、大山柏とともに大給尹の名を掲げる誤りもある。（阿部 2004）によれば大給は 1908（明治 41）年生まれで、大山柏あるいは研究所との接点は大給が慶應義塾大学に入学してからとされている。1922 年当時は満 13~14 歳の計算で、大山の「従者」5 名の中にいた可能は無い。

完璧は期しがたいが、こうした誤りが生じた原因と継承されてきた過程について、現在できる範囲で概観し、ここに付記して誤りの連鎖を断ち切りたい。付表には加曽利貝塚の 1922 年予備調査・1924 年人類学教室調査・1936 年大山史前学研究所調査に言及のある主要な文献の記載を抜き出してあるので参照されたい。表中、明らかな誤りあるいは問題のある記述部分はゴチックで示してある。

大山の測量を 1923 年とする誤りは、管見では（後藤 1985）の文章が最も古い。この間違いの原因となったのは（武田 1971）の挿図として史前研報告 fig.2= 本稿第 4 図を用いた際に「大山・大給両氏実測図 大正 12 年」のキャプションが付いたことにあるのではないと思われる。武田の文意からすれば史前研報告を出典とし昭和 12 年であるべきだったが、元号が大正に入れ替わっている。元号を用いたが

故生じた誤記または校正間違いであろう。

後藤によって文章化された誤りは、(小林達雄 1986) にほぼそのままの形で引き継がれる。更に(庄司 克 1987) では大山・大給に代えて設立以前の大山史前学研究所の名があげられ、(青沼道文 2000) でも大山史前学研究所を測量の主体としている。(西野 2017) では測量と発掘は 1922 年とするものの測量図の完成を 1923 年に繰り下げ、史前研報告掲載の調査成果を 1922 年に行われたと誤解した記述になっている。

1922 年測量の当事者に大給を加える誤りは、(後藤 1974) が把握できた一番古いものである。ただし大給の名が加曽利貝塚の測量図と共に示されたのは、(岡本 1963) で掲載した史前研報告 fig.2 に「大山 柏・大給尹実測」のキャプションが付けられたことが契機で、先述した(武田 1971) に引き継がれたが、いずれも 1922 (大正 11) 年のものとは断じていない(註 11)。(後藤 1974) の記述は(滝口 1977) に引き継がれる。大給の名を挙げた記述はこれが最後だが、以後大山・大給を大山史前学研究所によると書き換えた説明として(庄司 1987)・(岡田 1988)・(堀越 1994)・(青沼 2000) へと継承されている。堀越は(2017) で 1922 年の測量を大山自らと修正したが、史前研報告の図 2 枚をこれと同一視してこちらも大山によるものとしてしまった。

1924 年の人類学教室の調査で、A~E の 5 地点すべてを発掘したとする誤りもある。この誤解の連鎖は、調査当事者の一人が記した(甲野 1963) に原因があると思われ、大山の 1922 年測量図に E の記号も付いていたというものである。甲野を別にすれば(後藤 1985) が明確な間違いの最初と思われ、また「加曽利 E→堀之内→加曽利 B」の編年序列を層位的に確認した最初の事例が 1924 年の加曽利貝塚発掘だという縄文土器研究史上噴飯物の記述もセットになっている。(後藤 1987) では更に加曽利 E 式土器・加曽利 B 式土器を「新しいタイプの土器」とする記述が加わり、(庄司 1987) の「従来まで知られていなかった新しいタイプの土器」にいたる。(斉木 1987) もこの間違いの連鎖に連なる一例と思われるが、主体を大山史前学研究所の 1936 年調査に置き換える変種である。あるいは単独に生じた別種の間違いかもしれない。

以上の誤った記述は、いずれもささやかな誤植・記憶違いや思い込みから始まったと思われるのだが、それを受けた後続者が基本的な確認を怠ったために連鎖が続き拡大してきたのである。加曽利貝塚博物館は、加曽利貝塚に関わる研究の歴史も調査・検討し、誤解に基づく見解や記述があればそれを積極的に正していく責任を負っていると筆者は考えるものである。しかし上記の記述の多くが、かつて加曽利貝塚博物館に学芸職員として在籍した人の手になるものであり、基本文献 = (八幡 1924)・(大山史前学研究所 1937) に目を通せばたやすく気づく誤りだという事実にもやるせなさを感じる。現在在籍している職員に責任を問う筋合いではないが、博物館としての来し方を反省し行く末を見据えてもらいたいと切に願う次第であり、本稿にもあるだろう見逃しや誤りも積極的に正してもらえようをお願いしたい。

なお、(武田 1971) の記述は戦後に記された中ではきわめて正確で過不足ないものである。武田の引用図キャプションを誤植とした判断は、この点に基づいている。

註

- 1 本稿で検討した結果この想定は若干変更した。
- 2 同年、坪井正五郎・石田修三・松村瞭が発掘したものと思われる。

- 3 OAG= ドイツ東洋文化研究協会を小金井はこのように表記している。
- 4 (阿部 2004) は小金井が OAG 会員を大山邸に招いたと解釈しているが、小金井も招かれた側と読むほうが自然に見える。
- 5 西田は字貝塚に所在する荒屋敷貝塚と推定。史前研報告 fig.1 におおよそ荒屋敷貝塚の位置の ▲ 印に「貝塚」とある。
- 6 5 名中に広瀬 (池上) 啓介がいたかもしれないと考えるが根拠はない。広瀬の名は小金井日記 1925 年 5 月 3 日に大山従者として登場している。
- 7 (宮坂 1925) には「昨春此の貝塚の発掘に際して、十日間の仮りの宿りとした思出深い二軒の離れ屋、海保定吉、同菊次郎氏の宅をおとずれる」とある。
- 8 人が客車を押して運行する人車軌道は、各地で少なくない数が営業していた時期だが、千葉駅を起点とする軌道の資料はないので、小金井は人力車をこのように表現していたと思われる。
- 9 八幡は 29 日としているが、日記・野帳共に 28 日となっている。
- 10 小金井は 1923 年 3 月 2 日に大山を東京駅に見送り、1925 年 2 月 25 日に松村と共に、帰国 (「一昨日帰朝」とある) した大山を私邸に訪ねている。
- 11 大山柏の業績を改めて評価しなおした (阿部 2004) では、1922 年の測量に触れず「見学会の開催にあたり、事前に地形測量を完成させ」とし、本稿第 2 図については「貝層分布図」としているのでどのように評価しているのか判然としないものの、(史前学会 1936) パンフレットを資料として掲げていることもあり、後藤以来の 1922 年あるいは 1923 年に測量によって二つの貝塚が連結した姿が明らかになったという記述が誤認である可能性を意識しているように思える。

参考文献

- 八幡一郎 1924 「千葉県加曾利貝塚の発掘」『人類学雑誌』39 巻 4・5・6 号 東京人類学会 p.p.209~212
- 宮坂光次 1925 「下総加曾利行」『人類学雑誌』40 巻 1 号 東京人類学会 p.p.41~42
- 山内清男 1928 「下総上本郷貝塚」『人類学雑誌』43 巻 10 号 東京人類学会 p.p.463~464
- 史前学会 1936 『加曾利貝塚の概要』
- 池上啓介 1937 「第一回史前学会貝塚見学遠足会記」『史前学雑誌』第 9 巻 1 号 史前学会 p.p.73~74
- 佐々木 邦 1937 「人と貝」『史前学雑誌』第 9 巻 1 号 史前学会 p.p.69~72
- 大宮守誠 1937 「千葉県加曾利古山貝塚に就いて」『考古学雑誌』第 27 巻 6 号 考古学会 p.p.33~59
- 大山史前学研究所 1937 「千葉県千葉郡都村加曾利貝塚調査報告」『史前学雑誌』第 9 巻 1 号 史前学会 p.p.1~68
- 藤沢宗平 1938 「加曾利貝塚に就いて 附、土器の分類」『早高史学』第 1 号 第一早稲田高等学院史学部 p.p.23~38
- 山内清男 1939 「加曾利 B 式 (古い部分)」『日本先史土器図譜』第 III 輯 先史考古学会
- 山内清男 1940 「加曾利 E 式」『日本先史土器図譜』第 IX 輯 先史考古学会
- 執筆者不明 1951 「加曾利貝塚」坂詰仲男・篠遠喜彦・平井尚志共編『考古学辞典』改造社 p.p.71
- 甲野 勇 1953 「加曾利貝塚の発掘」『縄文土器の話』世界社 p.p.101~107
- 小林行雄 1959 「加曾利貝塚」水野清一・小林行雄編『図解 考古学辞典』東京創元社 p.p.160~161
- 芹沢長介 1962 「千葉県千葉市加曾利貝塚」『日本考古学年報 11 昭和 33 年度』日本考古学協会 p.p.73
- 平野元三郎 1962 「加曾利貝塚」日本考古学協会編『日本考古学辞典』東京堂出版 p.p.98~99
- 岡本 勇 1963 「加曾利貝塚の意義」『考古学研究』第 10 巻 1 号 考古学研究会 p.p.42~46

- 武田宗久 1971「第 1 章 序説」 同編『加曾利貝塚 I』 中央公論美術出版 p.p.5~7
- 星 新一 1972『祖父・小金井良精の記』 河出書房新社
- 後藤和民 1974「加曾利貝塚」『千葉市史 第 1 巻 原始古代中世編』 千葉市 p.p.99
- 滝口 宏 1976「第 1 章 加曾利南貝塚の調査」 杉原荘介編『加曾利南貝塚』 中央公論美術出版 p.p.11~12
- 滝口 宏 1977「第 1 章 加曾利北貝塚の調査」 杉原荘介編『加曾利北貝塚』 中央公論美術出版 p.p.11~12
- 後藤和民 1985「千葉県加曾利貝塚」 戸沢充則編『探訪 縄文の世界 東日本編』 有斐閣 p.p.265~267
- 小林達雄 1986「7 縄文社会の構造 縄文社会を伝える巨大貝塚・加曾利貝塚」『図説 発掘が語る日本史 2 関東・甲信越編』 新人物往来社 p.p.108~112
- 後藤和民 1987「加曾利貝塚の意義」『加曾利貝塚博物館 20 年の歩み』 千葉市立加曾利貝塚博物館 p.p.14~27
- 斉木 勝 1987「第 1 章第 1 節 研究略史 加曾利貝塚の発掘（一）」『房総考古学ライブラリー 2 縄文時代 1』 p.p.12
- 庄司 克 1987「加曾利貝塚の調査経過」『加曾利貝塚博物館 20 年の歩み』 千葉市立加曾利貝塚博物館 p.p.28~41
- 岡田茂弘 1988「遺跡と博物館」『千葉市立加曾利貝塚博物館開館 20 周年記念特別講演集』 千葉市立加曾利貝塚博物館 p.p.1~18
- 佐原 真 1989「山内資料の整理」『真福寺貝塚資料』 奈良国立文化財研究所
- 千葉市史編纂委員会 1993『絵にみる図でよむ千葉市図誌 下巻』 千葉市
- 堀越正行 1994「加曾利貝塚」 戸沢充則編『縄文時代研究事典』 東京堂出版 p.p.460~461
- 金子裕之 1998「資料の性格」『縄文後期加曾利 B 式・中国地方の陶棺・下総国分寺・尼寺資料』 奈良国立文化財研究所 p.p.1
- 村田六郎太 1999「調査データの修正と補足」『貝層の研究 I』 千葉市立加曾利貝塚博物館 p.p.168~172
- 青沼道文 2000「加曾利貝塚」『千葉県の歴史 9 資料編 考古 1（旧石器・縄文）』 p.p.566~573
- 阿部芳郎 2004『失われた史前学』 岩波書店
- 村田六郎太 2013『加曾利貝塚 東京湾東岸の大型環状貝塚』 同成社
- 西田泰民 2014「1924 年の加曾利貝塚調査」『人類学雑誌』第 122 巻 2 号 p.p.167~175
- 小金井良精 2015a『小金井良精日記 大正篇』 クレス出版
- 小金井良精 2015b『小金井良精日記 昭和篇』 クレス出版
- 小金井良精 2016『小金井良精日記 明治篇 1900~1912』 クレス出版
- 西田泰民 2016「小金井良精日記解説」『小金井良精日記 明治篇 1900~1912』 クレス出版 p.p.651~675
- 菅谷通保 2017「第 7 章 第 3 節 1 土器」『史跡 加曾利貝塚 総括報告書』 千葉市教育委員会 p.p.869~572
- 西野雅人 2017「第 2 章 第 1 節 調査・研究の歴史」『史跡 加曾利貝塚 総括報告書』 千葉市教育委員会 p.p.37~45
- 堀越正行 2017「日本の貝塚研究における加曾利貝塚の位置と意義」 貝塚博物館紀要 第 43 号 p.p.1~34
- 菅谷通保 2019「「加曾利 B 式」の覚書」 貝塚博物館紀要第 45 号 p.p.17~36

第 1 表 測量・調査の経緯と規模・形状などに関する記述一覧

	調査・測量の経緯と規模・形状などに関する記述
八幡一郎 1924	「一昨年博士は松村氏、大山柏公爵と共に実地踏査を試み、実測や試掘を行ったが爾来色々な事情の為に発掘は延期されて今年に至った」 (p 209) 「貝塚は非常に広くそれにすっかり開墾されて居ないのでどれ程の面積に亘って居るか殆んど見通しが附かない」 (p 209) 「上羽貞行氏が昨秋人骨を発見したと云う場所を発掘する事とした。此処は大山公爵の実測図に B とした所なので、それを踏襲して B 地点と便宜上呼び、翌 25 日から正式に発掘を開始した」 (p 209) 「B 地点は深林の奥深くあって幾分隆まった地である。大山公爵の試掘地に接し、上羽貞幸氏発掘地を含ませて各々二メートル平方を一区とする区画を東西、南北の方向に沿ふて定め廿区に分ち」 (p 210)
宮坂光次 1925	「昨春此の貝塚の発掘に際して、十日間の仮りの宿りとした思出深い二軒の離れ屋、海保定吉、同菊次郎氏の宅をおとずれる」 「東京の焼け出されが牛缶なんぞ食って贅沢だと、私共を焼け出されにしてしまった」 「草枯れ果てた春はよく見透しのついた広い貝塚も、茂った秋の草々に今は見分けられない。広く深く掘り広げた B 地点 D 地点、細く長く掘った E 地点、何れも埋土の上に草生い茂って、其の跡方もない」
史前学会 1936	「本貝塚の大部分は今日森林の中にあり、且つ土中に埋没して居るから、全般的に細部まで明確には、知りえない」 「表面に於ける貝殻散布の景況からすれば、東西に約二百米、南北に約三百米で、関東地方の貝塚としては、最大級に属する」
大山史前学 研究所 1937	「本貝塚大部分の状態に就て、私は既然大正 11 年頃、測定もしたが、機会を失してこれを発表しなかった為、色々の不結果を生んだことに就ては、私自身にも責任を感じずる次第であり、今回其測定図を基礎として、大給氏を労して、貝塚一覧図（第二図）を作成し、又本報告の一部を担任する所以も亦こゝにある」 (p 2) 「表面貝殻を見る所の末端を規準として概算すると、南北に約四百米、東西に約二百米に達するから、其各部分に依って、細部の相違もある可き点は、豫め御断りして置く」 (p 7) 「勿論この堆積堤は低い。所により様ではないが、其横断面は幅 5—10 米の間に於て、地表より最高 50—80 厘に過ぎないから、注意して居らないと、これが所在発見も困難な程度であり、部分に依っては、全く低く堤状を明に認められない箇所もある（第五図）。これらの一部は、既然大正 11 年測定の際、夫々記載し、且つこれ等の各部分を明にする為、図上に A—D の四点を与へて置いてが（第二図）、それ以外、E 点なる附名に就ては全く私の関知せざる所である」 (p 8)
藤沢宗平 1938	「現在（12 年 5 月）は殆ど開墾されてをり一部分は黍畑となつてをる」 (p 24) 「我々の発掘した地点は大山研究所の実測図に B 地点として現はれてゐる所であるが」 (p 25)

文献	調査・測量の経緯と規模・形状などに関する記述
甲野 勇 1953	「この調査のときに使った地図は、それより前に、大山柏博士が実測されたもので、それには貝塚群の一つ一つにたいして、それぞれ A B C D E という、記号がつけられていました」
岡本 勇 1963	※史前研報告 fig3 を引用掲載し「(大山柏・大給尹実測、縮尺約 1 万分ノ 1) 貝層は突堤状に図のように分布している。D の東方に E 地点が設けられた」との解説がある
武田宗久 1971	「大正 11 年には主として人骨採集の目的をもって試掘が行われた。このメンバーは、東京大学人類学教室の小金井良精、松村瞭、大山柏らである。大山はこの際実測図を作成した。続いて大正 13 年小金井良精、松村瞭は山内清男、甲野勇、八幡一郎らを伴って前記実測図の B 地点、D のほかに E 地点と呼ぶ 3 箇所を選んで発掘を行い、B・D 地点から計 3 体の人骨を得るなど多くの成果をもたらすとともに、初めて縄文土器の含まれる層位の違いによって編年を試みようとする科学的な調査が行われた」(p5)
後藤和民 1974	「大正 11 年の大山柏・大給尹らの地形測量によって、はじめてその全貌がとらえられ、貝層部がメガネ状や 8 字形という特異な形態を呈することが注目された」(p99)
滝口 宏 1976	「大正 11 年、松村氏並びに大山柏氏と共に遺跡を精査され、その際大山氏を中心として実測が行われた。この実測図は、のちに大山史前学研究所で増補されたのであるが、実測のおり A B C D の各地区名が付けられた」(p11) 「さらに昭和 13 年秋には大山史前学研究所が小調査をし、従来累積した調査結果をその時点でとりまとめて史前学雑誌上に調査報告を掲載した。この報告で遺跡の概略図が発表され」(p11)
滝口 宏 1977	「加曾利貝塚が南貝塚および北貝塚という二つの馬蹄形ないし環状を呈する大型貝塚から成っていることは、今日では一般的な常識となっているのに拘らず、それが明確に指摘されたのは、おそらく大正 11 年に大山柏・大給尹らによっておこなわれた加曾利貝塚全体の地形測量以来であり、それが一般に知られるようになったのは、むしろ、大山史前学研究所が昭和 11 年におこなった加曾利貝塚発掘調査の報告が出されてからであろう」(p11) 「それまでは加曾利貝塚が南・北二つの貝塚から成るものとは誰も考えていなかったであろう。その証拠には、それまでにおこなわれたいかなる発掘調査においても、このような南・北いずれの貝塚という意識はどこにも見当たらない」(p11)
後藤和民 1985	「1923 (大正 12) 年に大山柏氏らが地形測量をおこない、直径 130 メートルの北貝塚と 170 メートルの南貝塚という二つの貝塚が連結して「8 字型」をなす特異な貝塚として把握されるようになった。翌 1924 年、東京大学人類学教室の山内清男らによって、A・B・C・D・E の五地点における分層発掘がおこなわれ、B 地点では堀之内式土器を含む層の上から加曾利 B 式が、E 地点では堀之内式層の下層から加曾利 E 式土器が発見された。これは、加曾利 E 式→堀之内式→加曾利 B 式という土器型式の新旧関係をはじめて層位的に実証したものであり、以後の縄文土器編年の標準となり、加曾利貝塚の名を不朽のものにした。その後 1937 (昭和 12) 年、大山柏氏らの発掘により、南・北両貝塚の接合地点で、一軒の住居址床面に埋葬された二体の人骨が発見され、同氏は、加曾利貝塚が集落遺跡であることを指摘し、住人の死とともにその住居を廃棄した「廃屋墓」の存在を提唱した」(p266)

文献	調査・測量の経緯と規模・形状などに関する記述
小林達雄 1986	「大山柏氏は、大正 12 年に地形測量を実施し、直径約 130m の北貝塚と、直径約 170m の南貝塚の二つの環状貝塚の規模が具体的に明らかにされた」（p 108） 「昭和 12 年、大山柏氏は、再び本貝塚の調査にとりかかり、南・北両貝塚の接する地点で竪穴住居跡を一棟発掘し、その床面上に二体の埋葬人骨を検出した。そしてこれが住人の死とともに住居が廃絶された廃屋墓の存在を指摘したのである」（p 109）
後藤和民 1987	「大正 12 年（1923）、大山柏が主宰する史前学研究所によって、はじめて加曽利貝塚の全域が測量され、この貝塚が、直径 130m の環状を呈する北貝塚と直径 170m の馬蹄形をなす南貝塚という 2 つの大型貝塚が連結して、8 字形の特異な形態を有することが明らかとなった。このように、貝塚の形態・規模および立地地形などを具体的に図面上に定着したのは、これがはじめてである」（p 15） 「大正 13 年（1924）、東京大学人類学教室が人骨採集のための発掘調査を行ったが、その時参加したのは、土器型式による編年に情熱を燃やしていた山内清男らの若き研究者であった。前年の測量の際区分けされたA・B・C・D の各地区から各 1 地点ずつ、そして D 地区の東端に新たに E 地点を設けて、層位的な分層発掘を試みた。その結果、B 地点および E 地点から、それぞれ新しいタイプの土器が発見され、それが後日「加曽利 B 式」および「加曽利 E 式」と命名されることになる。しかも、このとき市川市堀之内貝塚から発見された「堀之内式」も伴出しており、B 地点では、上層から加曽利 B 式、下層から堀之内式が出土し、E 地点では、上層から堀之内式、下層から加曽利 E 式が発見された。したがって、地層の上下関係によって、加曽利 E→堀之内→加曽利 B という新旧関係が実証的に捉えられ、これが土器型式による編年の研究の基礎となり、加曽利貝塚の名は、編年の標準遺跡として、不動のものとなったのである」（p 15～16）
庄司 克 1987	「大正 12 年、大山史前学研究所の手によってはじめて貝塚の測量が行われ、これによって加曽利貝塚は8 の字形を呈する我国最大規模の貝塚であることが明らかになった。また翌年の大正 13 年には、東京大学人類学教室によって、前年の測量調査によって設定されたA～D 地点の発掘調査が行われ、E 地点（北貝塚）と B 地点（南貝塚）から、従来まで知られていなかった新しいタイプの土器群が発見された。これらは発見された地点名をとって、加曽利 E 式土器、加曽利 B 式土器と命名され、その後、前者は縄文中期後半の、後者は後期中葉の標準型式としてその編年の地位を与えられ、今日に至っている」（p 28） ※ p 29 には（fig. 3）を「大山・大給両氏実測図（大正 12 年）」のキャプションを付して掲載しているが、図からはスケールの下にあった大給のサインが消されている。
斉木 勝 1987	「加曽利貝塚は広大なため、昭和 11 年、大山史前学研究所が調査する際に便宜上南貝塚の東側を A 地点、西側を B 地点、南北貝塚の接する地点を C 地点、北貝塚の西側を D 地点、また、未調査の北貝塚の東側を E 地点と呼んで調査を行いました。この B 地点とこれに近接した A 地点などから出土した土器は加曽利 B 式、E 地点から出土した土器が加曽利 E 式の基準になったのでした」（p 12）

文献	調査・測量の経緯と規模・形状などに関する記述
岡田茂弘 1988	「大正 11 年（1922）に 大山史前学研究所 によって地形測量が行われて、 南北 2 つの環状貝塚が連結した「8 字型」あるいは「メガネ状」を呈する特異なプランをもつことが明らかとなった 。ついで大正 13 年（1924）に東京帝国大学理学部人類学教室が行った発掘調査によって、B 地点と E 地点から出土する土器に相異のあることが知られて、のちに「加曽利 B 式」と「加曽利 E 式」という関東地方の縄文土器型式認定のもととなるとともに、両型式の土器の層位的な上下関係から縄文土器編年の糸口がつかまえられた。やがて、加曽利 E 式は縄文時代中期後半に、加曽利 B 式は後期中葉に位置づけられた。この結果、加曽利貝塚は縄文土器編年上のタイプ・サイトとしての価値を持つにいたった。さらに、昭和 12 年（1937）には大山史前学研究所によって本格的な調査報告書がまとめられて、加曽利貝塚の現状と内容の一端が公開されたことは、わが国の考古学史上の一ページをなすものである」（p 2）
堀越正行 1994	「1922 年（大 11）に 大山史前学研究所 が地形測量と小発掘を実施し、 南北二つの環状貝塚が連結する 8 字形・メガネ状の特異な貝塚の形状が明らかとなる 。A～D の 地区名 はこの時つけられた」（p 461）
青沼道文 2000	「 大山柏を代表とする大山史前学研究所は、1923（大正 12）年 、考古学的見地からの測量と小規模な発掘調査を行い、貝塚の規模・形状などをはじめて明らかにした。なお大山史前学研究所は、 周辺地域も含めた貝塚の総合的な調査 を 1936（昭和 11）年にも実施している」（p 568）
村田六郎太 2013	「1922 年に松村瞭・大山柏が貝塚の実地調査を試み、測量・実測や試掘をおこなっている。この段階で加曽利貝塚を A から D の四点に区分している。しかし、測量の内容等は、大山が翌年の 1923 年から 1925 年にかけてドイツに私費留学していることや、帰国後の軍役、大山史前学研究所の設立などによって報告されず、1936 年の同研究所による加曽利貝塚の発掘調査と翌年の報告によって A から D 点の詳細が明らかとなった。ところが、大山はこの報告の中で E 点については関知していないことを明言している」（p 10～11） 「E・B の各地点について大山は、単に「点」と表現しているが、報告図を見ると貝層に特定のラインで区分けしていることから、現在の区域を意味するものと読みとれる。八幡は「地点」としているが、ある程度区域を意識した特定の場所を指しているようである」（p 12～14）
西野雅人 2017	「大正 11（1922）年、大山柏氏らが地形測量と発掘を行い、 翌年 に地形測量図が作られた。貝殻の集積する部分が『凸堤状』に長く連続し、『二つの環の複合』をなすことが初めて明らかにされた。（略）ただし、図が公表されたのはかなり遅れて、昭和 12（1937）年の発掘調査報告書においてであった。大山氏らは、 大正 11（1922）年 加曽利貝塚で断続的に発掘を行っているが、人骨の平面図やエレベーション図、地層断面図の作成のための写真撮影を行うなど、先進的な取り組みが多く、遺跡の発掘・研究の手本を示す役割を果たした」（p 39）
堀越正行 2017	「大山柏は、（略）1922 年 8 月 30 日に加曽利貝塚 B 11 地点（B 大正 11 年地点の略）の 発掘と地形測量 を行った。陸軍士官学校の測量実習で身に着けた測量術で大山自らが作成した測量図 2 枚の公表は 15 年後のことである」（p 3）